

「ぐだ子が武蔵ちゃんの幕間にレムレムしたら本当はきよひー（オルタ）の幕間だった話」他1話

琵琶湖くじら

ぐだ子（女主人公）を主役にするFate/Grand Orderの二次創作短
篇。

各篇独立した話なので、登場するサーヴァントは異なります。

「道成寺天花法剣（どうじょうじはなのつるぎ）」 ※「魔を降す剣」から改題

登場人物…武蔵、清姫

「林檎の聖者」投稿中

登場人物…マッシュ、ドクター、ダ・ヴィンチ、エジソン

目次

道成寺天花法剣	1
道成寺天花法剣	1
林檎の聖者	43
林檎の聖者	43
林檎の聖者	54
林檎の聖者	63
林檎の聖者	74

道成寺天花法剣

道成寺天花法剣

夢を通つてある小さな特異点に迷い込んだぐだ子と武蔵。武蔵の記憶から再現された世界かとも思われたが、二人の前に現れた異界の清姫が告げる。この世界は道成寺縁起、安珍と清姫の伝説の舞台となった場所であり、狂える蛇が民衆を苦しめている。ぐだ子と武蔵は、彼女に協力して、事態の解決に乗り出すのだった。

外題…道成寺天花法剣（どうじょうじはなのつるぎ）

「魔を降す剣」より改題

こんな夢を見た。腕組みをして立っていると、二刀流の女が近づいてきた。

「なんて漱石を気取ってみたいなんかして。まーたこのパターンかー。もう十夜ど

ころじゃないぞお」

マイルームのベッドの上で、まどろみの中に落ちるやいなや、間を置かずに訪れる唐突な覚醒。不自然なほど眠気の残らない、しっかりと開かれた目で辺りを見渡せば、お馴染みとなった見知らぬ光景。

「今回はいつのどこに飛んだのやら」

グラントオーダーを開始してより、いつの頃からかぐだ子は夢を見るようになっていた。

契約をしたサーヴァントと内容を共有する不可思議な夢だ。

マスターとサーヴァントとの間に繋がれた、霊的な経絡パスの影響だろうとするのが医療班と技術班とに共通する見解だった。なぜそれが起こるのか、原理に対する見解は十人十色で現状不明としか言いようがなかったが。

そして稀に出会ったことのないサーヴァントと繋がることもあった。

「武蔵ちゃんと初めて会ったのも夢の中でしたよね」

「いやー。あたしにとっては生身の頃の現実だったんだけどね」

しんめんむさしのかみふじわらのはるのぶ
新免武蔵守藤原玄信。通称を宮本武蔵。言わずと知れた二刀流、本朝第一の剣

豪である。正しくはぐだ子の生まれた世界とは、異なった歴史を歩んだ平行世界の武蔵である。数奇にも平行世界の漂流者と成り果てた彼女と、いかなる巡り合わせか、ぐだ子は夢の中で出会い、一つの冒険を共にした。

「そうだった。ねえ、武蔵ちゃん、さ。この場所に心当たりってある？」

「んー。むむむ……ごめん！ 日本のだこかだとは思うけど、ちょっと分かんないや」

「だよね！ ありがとう。武蔵ちゃんは悪くないよ。実は私もそうだろうなって思ってた。だって、ここ、一面見渡すばかりの、焼け焦げた原っぱだし。なんだろう山火事でもあったのかな」

きよろきよろと周囲を見渡す。

焼野原はかなりの遠方まで及び、四方どちらを向いても、目に入る山々を越えても続いている気配があった。地勢としては、本州のどこか、それも近代より前の時代ではないかと思われた。

その様子を見守っていた武蔵だったが、やにわに刀の柄に手を添えると、一閃、剣身を煌めかせ、飛来した何かを一刀の下に切り捨てる。

命と共に空を飛ぶ呪力も失われたのか、火の粉をまきちらしながら、重力に依って地に落ちる。

傷口から燃え盛る血が流れ出て、轟々と、周囲もろともその蛇体を燃やし尽くした。

「……蛇？」

「蛇ね。空を飛び火を吐き散らす蛇か。むかし明国に迷い込んだ時、土地の妖術師が使役する似たようなのを斬ったことがあるんだけど、さては、その同類かしら。なんていったっけダンサーだかタンサンだかそんな名前の」

「へー。でも、火を吐く蛇かあ。翼もなかったよね。ドラゴンじゃなくて、蛇が火を吐くって珍しいよね。……毎日見てるような気もするけど」

「呼びました？ ま・す・た・あ（ハート）」

「うんうん。そんな気はしてた」

「え？ は？ 怖！ たしかに今まで居なかったよね。影も形も何の気配もなかったんだけど」

「武蔵ちゃん。きよひーだし」

「ええー」

「慣れだよ、慣れ」

「うふふ」

混乱と諦観と鈴を転がす笑い声。

「ま。いっか！ それで、清姫ちゃんも来たってことは、今回の主役は、私じゃなくて、彼女なのかな、もしかして」

「その可能性が高いかなあ。それで……はじめまして、だよね、きよひ……清姫さん」

「まあ！ 一目で分かってくさるだなんて、あなた様と縁を結んだ清姫は、愛されているのですね」

「あの子の愛はちょっと重すぎて、1%も返せてる気はしないけど、それでもすごく良い子だしね」

和やかに笑い合う二人に、呆れを含んだ視線を向けると、武蔵は刀を鞘に納めた。武蔵には目の前の彼女とカルデアの清姫と見分けがつかなかった。総州松平の姫君といい、我が主はよくよくこの顔に縁があると見た。

「では、あらためてご挨拶を。縁により招かれたカルデアのマスター様、従者様。わたくしはクリカラ。かつて清姫と呼ばれた少女を器に、サーヴァントとしてこの地に応現しました。クラスはセイバーですわ」

「セイバークラスのきよひー」

ぐだ子は戦慄した。脳裡をよぎるナイスポートなる不穏な響き。実際にはよく似た別人に等しいと分かっているにも、鋭い恐怖が背筋を走り抜けた。

「あ。ごめんなさい。ちょっと驚いちゃって。クリカラさんは清姫の別側面というわけじゃなくて、あの子を核にした……つまり神さま系？」

「神さま系です」

一度だけランサーにクラスチェンジした姿を見たが、あれはあくまでもカルデアと契約したバーサーカー清姫に対して行われた、スカサハの施したルーンによる霊基の一時的な改竄である。

今回はそれとは異なり、イシュタルやパールヴァティーら依代の身に降臨した女神たちの事例だろう。

「クスクス。では参りましょうか。マスター様、新免様。この地を覆う厄災。わた

くしたちがこの地に呼ばれた理由。その仔細は歩きながら説明させていただきますわ」

「分かった。武蔵ちゃんもそれでいい？」

「もち。行きますか」

三人は、クリカラの先導で、その場から歩きだした。

「それで向かう先は？」

「道成寺。正確にはその焼け跡ですわ。つけくわえると今は延長六年、清姫が安珍を焼き殺した日から、一月ほどが経っています」

「焼け跡って言った？ それっておかしくない」

武蔵が待ったをかける。

「道成寺のお話は私も知ってるけど、あくまで焼いたのは鐘に隠れた僧侶安珍で、お寺は焼いてないはずじゃ。私が生きてた頃も残ってたわよ。そりゃあ建て直しはしてるでしょうけど。それともこっちの世界だと寺ごと焼いたってこと？」

最後の問いはマスターに対して向けられたものだ。

当然、応えは「否」である。

ぐだ子の知る安珍清姫の伝説でも、クライマックスは梵鐘に隠れた安珍が鐘ごと焼き殺される場である。寺は焼けない。

「清姫は狂ってしまったのです。いえ、最初から最後まで恋に狂ったバーサーカーですけど、そういうことではなくて、狂おしく心を焼き、身を焦がす愛恋の情火は、ついには彼女を、無辜の衆生にまで火を吐きつける悪しき蛇に成り果てさせてしまいました」

楚々たる外觀、玲瓏とした声、歩き姿も清姫そのものだったが、やはり別人なのだなどとぐだ子は思った。

こんな客観的に、いっそ突き放したくらいのもので、己の狂愛を語れる娘ではない。

「そんな折、不動明王の法劍を振るう強き剣士と、彼女を従えるマスター様が現れたのです。これはもう、わたくし、運命ではないかと！」

いや、やっぱり、思い込みが強そうなところは一緒かな。

「さあ！ 見えてまいりましたわ。あそこが蛇のねぐらです」

そうするうちに、焼け落ちた、かつて寺であった物の残骸が見えてきた。正しく

は、もっと前から見えてはいたが、それがそうだとはい分からなかった。それくらい無残な有様であった。

* * *

「まずは一当て。せいやっ！」

鐘に巻きつく大蛇に武蔵は斬りかかった。

一当ての言葉通り、相手の力を計るのを目的とした軽い攻撃ではあった。しかし、そこは古今随一の劍豪の業前である。月並みの怪物であれば、それで勝負はついていただろう。

「硬ったー」

岩でも叩いたような衝撃に顔をしかめる。

煤で薄汚れた黒灰色の蛇体の下から、元はカルデアの清姫と同じ白蛇であったことをうかがわせる、白鱗が顔をのぞかせる。

「まさか鱗の一枚も剥がせないとは。自信なくすわねっとお！」

飛び退り、火の吐息から軽やかに身をかわす。

斬って斬れないとは思わなかったが、考えなしに無理を押しして撃ちこめば、劍が曲がるか、腕が痺れるか、良くないことがありそうだった。

「ふっふっふ。まあ、今回はあくまで偵察だし？ 三十六計をきめさせてもらいましょう！ じゃあ、またね！」

踵を返し、一目散にその場から走り去る。

蛇は興味がないのか、逃げる武蔵を追うことはなかった。

足早に駆けることしばし。元は庭石であったと思わしき大石の陰で、待機させておいたマスターと合流する。

「お帰り。どうだった？」

「いやー。負けた、負けた、強いわ、清姫ちゃん」

あれちょっとずるいんじゃない、と武蔵はぼやいた。

清姫の宝具による転身には通常時間制限がある。それを常時展開しているようなものだ。

「あれが今の清姫。悪しき蛇ですわ。平時はああして安珍の墓とも言うべき梵鐘に

とぐるを巻いて守っていますが、時折、狂を発しては、ねぐらより這い出で、自ら焼き殺したはずの安珍を求め、探しまわり、目につくものを手当たり次第に焼いてまわるのです」

クリカラが解説する。

「紀州国衙から討伐の軍が幾度か派遣されましたが、すべて無残な失敗に終わりました。当然ですわね。あれは人の身が衆になったからとて討てる物ではありません。一百年の昔に没した坂上田村麻呂、今より四半世紀の未来に生まれる源頼光、当代であれば藤原秀郷たわらのとうたの如き、不世出の英傑のみが倒しうる大怪異」

そして、と言葉をつづける。

「日ノ本一の武芸者に相応しき相手かと」

「またまたー。日本一だなんておだててくれちゃって、照れるなあー。でも、ちょっと不思議なことがあるのよね。クリカラちゃん。ううん、俱利伽羅くりからりゅうおう竜王。あなた、どうして、自分で戦わないの？」

表情も豊かに頬を染め、芝居っ気たっぷりに照れてみせ、一転、眼光も鋭く、いかなる意図があつてのものか、と抜き打ちに追求する。

「戦いは不得手……などと白々しい嘘は申しませんわ。権現の身とは言え、わたくしは明王の利剣なる竜種ナーガラージャの王。いかに盛強でも人の変じた妖蛇悪竜おくに後れを取りはいたしません。すべてはあの哀れな娘の魂を救うためです」

「きよひーを救う？」

「その通りですわ、マスター様」

* * *

「きよひーを救う？」

にわかには真剣な顔を作る。

別にこれまでも不真面目だったわけではないが、なおざりにして、聞き逃してはならない言葉だと確信した。

カルデアの清姫は、ぐだ子にとって、導きのドルイド僧クー・フリーンら冬木組に次ぐ、オルレアン以来の古株も古株である。

たとえこの夢の世界の清姫が、自分の知る彼女とは究極的には別人であること、

既に悪逆の怪物に墮した、異なった歴史のなれのはてだと理解していても、好き好んで討ち滅ぼしたい訳はなかった。

「いや、ちがうか。救うのはきよひーの魂って言った」

「その通りですわ、マスター様」

クリカラは肯定する。

「マスター様の支援を受けた新免様なら、斬り殺すのは容易でしょう。あるいは放っておいても遠からず討たれる定めでありましょう。怪物退治は人の英雄の仕事ですもの。けれど、竜王たる清姫／倶利伽羅、人類の守護者たる英霊、なにより清姫と縁深いマスター、これだけ揃ってやる事が、斬って、殺して、さようならでは、あまりにも情けないではありませんか。それは御仏の心に叶うものではありません」

清姫の口を借りて、歌うように、託宣のように、倶利伽羅竜王は語りかける。

「地獄とは心の内に存するもの。瞋恚の熾火は未だ消えず。今もあの娘の魂は壊劫の火に焼かれ続けているのです」

「……きよひー」

「なにより、わたくしの此度の応現に際して、人であった頃の清姫の体選ばれたこと。これ自体が、まさしく御仏の導き。わたくしは、なんとしても、あの蛇なる娘を、無明の闇から解き放たねばならないのです。マスター様、新免様、伏してお願ひ申し上げます。どうか、わたくしをお助け下さい」

「もちろん。ううん、こっちが助けてもらおう側なんだと思うな。協力しましょう。それで、わたしは、どうしたら」

すると、一言。ひどく神妙な態度でクリカラは返した。

「殴ります」

「はい？」

「殴って、殴って、殴り倒して、命の危機まで追い込んで、ぐずぐずと恋だ愛だの考えられなくして、一度正気に返らせませす」

「それは正気なのかな？」

殴り飛ばされる蛇ではなく、発言者が。

「……如来の慈悲は宏大無辺。あらゆる衆生を照らし、救う、光明です。触れた者は自ずから悟り、苦界より脱し得ましょう。ですが、ええ、ですが、わたくしは

竜王ですもの。普段のお仕事は不動明王の剣として悪魔を調伏し、聞き分けのないお馬鹿さんたちを力づくで正道に立ち返らせることですよ」

「そんな殴ルーラーみたいなのを」

「……ぷっ！ あはははははははは！」

武蔵が耐えきれないとばかりに爆笑した。邪魔しないように黙っていたが、これは無理だ。

「いいわ。いいわね！ 私、そういうの好きよ」

* * *

「やっほー。清姫ちゃん、さっきはごめんね。牽制の一刀からの逃げの一手とか失礼にもほどがあった。反省してます。あれよね召喚に際して与えられた未来の知識から似た事例を探せば……そう、ピンポンダッシュ」

呑気なことを言いながら、武蔵は再び蛇の前に進み出る。

「ですので、リベンジマッチの今回は、最初から本気も本気の全力です。」

劍轟抜刀！

南無。天満大自在天神！

南無。大日大聖不動明王！

我が開眼せし空の劍。無念無想すら断ち切らん。いわんや邪念邪想をや。初撃より全霊をもってお相手いたす」

武蔵の全身より劍氣がほとぼしり、天地の精氣と交じり凝こって、不動明王の威容を形作る。

明王の四臂が携える地水火風の四大の劍が、鐘に絡まる蛇を切り刻む。

下等な妖物化生であれば、目にするだけで腰が砕け、触れるだけで塵と化す、悪想打破の破邪の劍。

あるいはただの幻影ではなく、意気に応じた尊格の眞の顕現であったかもしれない。

しかし、蛇もさるもの。

傷口から燃え盛る血を流しながらも、身をよじり、牙を立て、毒炎を吹いては、果敢に迎撃し、ついに斬撃をしのぎきる。

怒れる蛇が、鎌首をもたげ、明王を将来した術者を、悪意に爛々と輝く鬼灯あかがちの眼まなこで睨みつけた。

「離れたな？」

不敵な顔で武蔵が応じる。

剣豪宮本武蔵の宝具が不動明王の勸請かんじょうで終わるはずもない。

もとより狙いは大蛇ではない。

その蛇体がとぐろを巻いて、頑なに守り続ける安珍の墓標。焼け焦げた梵鐘が真の標的であった。

武蔵の剣が振り下ろされる。

「六道五輪・俱利伽羅天象！」

天壤不二てんじょうふじの大斬撃。四大を越えた空の境地の一刀である。

あっけなく鐘は砕け散り、金屑と消し炭と骨の欠片が混ざり合った残骸が、あたり一帯に撒き散らされた。

蛇のすべてが凍りついた。

静寂。そして絶叫。

「安珍様！ 安珍様！ うわあああああー」

気の触れた蛇は残骸に取り縋り、この世の終わりを見た幼子のように、いっそ無垢とすら思える声音で泣きじゃくった。いつしかその姿は大蛇から、見慣れた人の姿へと戻っていた。

「ええーそういう反応？」

一層怒り狂って襲い掛かってくるものと考えていた武蔵は、思いもよらぬ愁嘆場
に、激しい居心地の悪さを覚えざるを得なかった。

後味が悪くとも、いっそのまま斬り殺してやった方が、彼女の為なのではない
か、武蔵がそう思案していると、ふいにぴたっと清姫が泣き止んだ。

天真爛漫を絵に描いた、万丈の喜びに溢れた笑顔で、振り返る。

「まあ！ 安珍様ったら、そちらにいらっしゃったのね、死んだふりだなんて、人
をびっくりさせるのがお上手なんだから。そう、本当に、人をだまして、びっくり
させるのがお上手ですこと。安珍様が我が家を避けて行ってしまわれたと聞いた
時、わたくしがどれほど驚いて、悲しんで、怒って、怨んで、憎んだか！ 妄語
戒ひとつ守れぬ悪僧め！ 嘘吐き、嘘つき、うそつき！」

数多の修羅場を勝ち抜いてきた宮本武蔵をして、いすくまるほどの怨念と愛慕の入り混じる情念の圧力。

感情のうねりにあわせて魔力が高まっていく。

「武蔵ちゃんさがって！ 宝具が来る！」

異常な魔力を察したぐだ子は迷わず撤退の判断を下す。

「まあ！ 安珍様が一度に二人も。あらあらどちらが本物の安珍様なのかしら。迷ってしまいます。本物と偽物。どちらを先に焼きましょう」

「どっちも人違いです。なんて言って素直に聞くわきゃないか！ マスター！

君こそ下がりなさい。クリカラちゃん、そっちはお願い。私の方はどうやら逃げている余裕はありません。なーに。爪先半分、空の位に踏み込んだ私です。なんとかのいで見せましょう」

腹を括った武蔵の前で、清姫が宝具を解き放つ。

『嗔恚あなの毒なよ、世界たをを焼こけろす』

これは一つの恋の歌　嘘偽りのない無垢なる恋

我が恋よ燃え上がれ

赫々あかあかと物狂おしく炎を上げて

粟散す最果ての辺土くまで、轟いておくれ

あなたを一目見た日から、わたしの世界ははじまりました
わたしはあなたに愛を捧げて、あなたも受けてくれました
ただ一日限りの邂逅が、あまりにも眩しくて、愛おしくて

きのうのすべては、霧に閉ざされてしまったようです

かわってあなたと過ごすあしたの、なんという輝きでしょう

その日その時までわたしは幸福に包まれていました

わたしの恋、わたしの愛、わたしの世界

あなたがわたしの恋を殺すまで

嘘だ、嘘だ、真っ赤な嘘だ

だってあなたは約してくれた

わたしに会いに来てくれるって

だれもかれもが嘘を吐く

訳知り顔で小娘に、世の道理を説くように

あの男は行ってしまった

お前は騙されたのだ、と

これが叶わぬ恋であるものか

あなたが去ったと言うのなら

わたしはあなたを追うままです

どこまでも、どこどこまでも、追いかけて

走れぬように足を焼き

這えぬように腕を焼き

騙れぬように舌焼いて

嘘を誠に見せましよう

安珍様 ずっとずっと 永劫果てる先まであなたを……。

清姫の全身から吹き上がった毒の炎が武蔵を飲み込んだ。

いたるところで火柱が上がり、あたり一面が火焰で染まる。

「武蔵ちゃん！」

「……マスター様、しばしご勘弁を、失礼をいたしますわ」

苦鳴を發したぐだ子を、クリカラは抱え込むと、火勢の及ばぬ所まで飛ぶように駆けた。

いくつかの火柱が寄り集まって、ひときわたく長大な火柱を形成すると、その中から大蛇が再び姿を現した。また中小の火柱から、無数の蛇が吐きだされて行く。

ぐだ子たちがこの世界で最初に遭遇し、武蔵の手で一刀断ち割られた蛇だ。

「騰蛇とうだですわ」

手にする扇で群がる蛇を追い払いながら、クリカラが火蛇について教授する。

「ここにいるのは、神性も失われた影法師のようなモノどもですが、もとは唐土もろこしの蛇神で、陰陽道では十二神将の一つに数えられます。悪しき蛇の放つ膨大な火の力に引き寄せられたのでしょう。……ええい、わずらわしい！」

一喝すると、火を吐く蛇を、倍するほどの猛火が襲い、ことごとく燃やし尽くした。

それからも襲い来る蛇を幾度か蹴散らした。

襲撃が弱まったところで振り返ると景色は一変していた。

「うわあ。なにこれ、地獄絵図か何か？」

炎獄であった。

目路のかぎり、あらゆるものが炎に包まれていた。草木はもとより、土が焼け、岩が焼け、大気が焼けて、空の雲にすら火の手は届いた。空は夕焼けよりも赤々と染めぬかれ、雲は溶けおちて、火の雨が降りそそいだ。

それもただ尋常の火が燃えているだけではない。

心を焼いて、身を焦がす、瞋恚の毒の、その具象。

「これがきよひーの心象風景」

武蔵の一撃に呼応して、展開された『瞋恚の毒よ、世界を焼け』。

ネロの所有する黄金劇場。あるいはバベツジの纏う蒸気鎧。それら心象風景を具現化させる系統の宝具に類似した性質を持つと見えた。

で、あれば、この毒気に満ちた火炎地獄こそ、清姫の抱く怒りその物。

カルデア謹製の礼装を纏っていないければ、なによりクリカラが連れ出してくれな

ければ、いまごろ熱と煙にまかれて命はなかったのではないか、ぐだ子はあらためてぞっとした。

「どうってことありませんわ。新免様にも頼まりましたしね。ですが……新免様が先に逝かれるだなんて」

見込み違いだったかとクリカラは内心で独語した。

「ちがうよ。武蔵ちゃんは死んでない。分かるんだ」

マスターとサーヴァントの間を通る霊的な経絡は未だに健在だった。

「わたしも、武蔵ちゃんも、もっとすごい修羅場をいくつも潜り抜けて来たんだ。こんなものなんてことない、へっちゃらさ」

「まあ。それは頼もしいですわ」

ぐだ子の体が小刻みに震えていることは、彼女に寄り添うクリカラには明白であつたが、少女の強がりと、それを支える従者への信頼とを竜王は言祝ことほいだ。

「これでは、わたくしも、負けてはいられませんわね」

クリカラが扇を一振りすると、中空に生じた無数の火の玉が、燃え盛る炎の中へ飛び込み、毒の火を焼いた。

古い映画で見たエジプトから脱出するモーセらの前に示された奇跡のように、火が割れて、道ができる。

「すごい」

「ざっとこんなものですわ」

感嘆するぐだ子に、まんざらでもない様子で、コロコロと笑う。

「ですが、これは一時しのぎにすぎません。泣く子が叱声に面喰い、しばし怒りを忘れたまでのこと。気を取りなおせば、すぐにまた憤怒に心を支配され、地上を地獄に変えるでしょう」

「うん。行こう！ 武蔵ちゃんと合流して、きよひーを直接叩く。つまり最初の目標通りだね。よし！」

ぐだ子は意を決して、清姫の宝具の中に飛び込んだ。

無秩序に徘徊する蛇の群れを時にやり過ぎし、時に打ち払い、ぐだ子は奥へと進んでいく。

「どんどん炎が勢いを増していくね」

中心に近づくほど、地形は荒廃の度を増し、火勢もまた強まっていく。

「だって言うのに、なんて物悲しい」

火が燃え盛っているというのに、この寒々しさは何と言おうか。

きっと、彼女には、もう安珍への執着と怒り以外の何物も残されてはいない。怒りに、心の中のありとあらゆるものを焼き尽くされてしまったのだ。

「だとしても、ひどい！　こんな有様があの子の心象だって言うの」

元来、清姫は一目惚れした旅の僧の元へ夜這いするほどの情熱家である。

また、ぐだ子の知る限り、言動共に過激なヤンデレ娘だが、周囲をことさらないがしろにしたり、排他的に振る舞うようなこともない、根本的には心根の優しい、温厚な人物である。

たびたび「戦いは不得手」だと本人も言うように、本当なら平穏な陽だまりの中にこそいるべき娘だ。

その彼女の、平行世界の別人だとはいえ、彼女の心がこれほど虚無的である事實は、ぐだ子の心を苛んだ。

「あの子が自分でそうあることを選んだんだ。だから、これはわたしの気持ちの押しつけだ。でも、わたしはそんなの嫌だ。きよひーは友達なんだ。友達が道を間違

えたなら、腕をつかんで引き戻してやる。絶対だかんね！ わかったか！ きよ

ひー！」

びしっと人差し指を、清姫に突きつけ、ぐだ子は宣言した。

「お帰りになられたのですね安珍様。うれしい！」

喜色满面。初対面の女を安珍と呼び思慕の念を寄せる。

「聞いちゃいないか。清姫！ まず、わたしは安珍じゃない」

「はい安珍様」

「だから違うってば」

「安珍様？」

「うぐぐ。つぎ、安珍はもう死んでる。清姫が自分で焼き殺したんだ」

「おかしなこと。わたくしは今、安珍様とお話していますわ」

「なにこの堂々巡り。分かってたけど、うちのきよひーだってまだ話は通じるぞ」

童女のように無邪気で、同じくらいに頑なだった。

ぐだ子の啖呵を認識しているかも怪しい。

カルデアの清姫もぐだ子を安珍と呼ぶことはある。そこまでは同じだが、彼女の

場合は夫婦の縁は二世にせにおよぶ理屈から、自分を召喚したぐだ子は安珍の生まれ変わりに違いないと信じているまでで、会話自体は成立する。

一方こちらの清姫は一人ですべてが完結してしまっている。破綻具合がファントムを彷彿させる。

「聞けたら、この分からず屋。清姫、いまのあなたは見るにたえないよ。気づいてる、あんなに嘘が嫌いなあなたが、どうしようもないほどの大嘘吐きになっちゃってるんだよ」

「嘘？ このわたくしが？ 安珍様ったら、どうしてそんな悲しいことをおっしゃるの？」

「本当は自分でも分かっているんでしょ？ ただ認めたくないだけで。安珍はもういないって、清姫が自分自身で焼き殺しちゃったって」

さもなければ、安珍が隠れた梵鐘を、あれほど大切に守る理由がない。

鐘の内部があらためられず、安珍の死が確定しさえしなければ、目をつぶっていられる。

時折、発狂したように安珍を探し回ったのも、安珍が未だ存命で逃げ回っている

と自分自身に言い聞かせる為のものだろう。

「やめ……」

「そこまでは……うん、嘘はついてないよね。都合の悪い部分に目をつぶっているだけで。でも、さつき武蔵ちゃんが鐘を打ち砕いて、中身をあばいちゃった後で、なおも他人を安珍だつて言い張るのは、明らかな嘘だよね。だつて清姫自身が信じていないんだから」

「やめて！」

清姫は金切り声で叫ぶと、半狂乱になって、火の玉をぐだ子に向けて撃ち放った。だが、動揺しきった状態から、感情任せに放たれた攻撃など、たかがしれたもの、ぐだ子の前に進み出たクリカラが、扇をひらりとあおぐように使えば、瞬く間に消え去る程度のものであった。

「お見事ですわ、マスター様」

「気が重かった。正直今もすごくつらい」

「いたしかたなかったのです。誰かがあの娘の偽りを指弾する必要があるかもしれません。一念を糧として動く者は、純粹な分、激しくも脆い。怒りがわずかなりと薄れた今

なら、つけ入る隙もありましょう」

クリカラはぐだ子をねぎらうと、最後に「あとは打ち合わせの通りに」と小さな声で言い添える。

「悪蛇よ聞きなさい！ 恋すら焼き尽くしてしまった哀れな竜蛇よ。おまえは『嘘』をついた。おまえ自身を裏切った。おまえの歪んだ愛は愛染明王ですら見放されることでしょう。せめて、わたくしの炎で焼き殺してあげます」

ぐだ子の後を受け、クリカラはさらに糾弾する。

「この身は剣士にあらず。我は剣なり。不動明王が降魔の劍。貪瞋痴とんじんちの三毒を焼く智恵の焰」

宝具解放の神呪。

「どうか御照覧あれ。マスター様。劍を持たぬこの身がセイバーのクラスたる所以をお見せしますわ」

劍セイバーの神靈セイバが呪句を唱え、宝具を、あるいはすなわち己の本性たる竜身を解き放つ。

『現身火生三昧』

クリカラの胸元、ちょうど心臓の辺りから火を纏った竜が現れる。

竜は天に昇り、たちどころに天を覆うほどに大きくなると、八方をねめつける。竜が一声吼えると、地を焼く炎は勢いを弱め、火蛇の群れはたちまち塵と化した。

＊ ＊ ＊

「ふむ。火生三昧ときたか。ははは。これは案外、清姫は不動明王との仏縁があるのかもしれないな」

いつだったか、清姫の宝具を見た胤舜が、そんなことを言いだした。

「うん？ ああ、火生三昧というのはだな、書いて字のごとく火を生じる三昧だ、では意味が分からんよなあ。ははは。怒るな、怒るな。三昧とは、簡単に言えば、瞑想によって到達できる精神が集中しきった状態のことだな。三昧正受。三昧境などともいうな。そしてこれが只人ただひとならぬ菩薩や明王ともなれば、三昧に入れば特有の神通力を発現される。不動明王の場合は、一切の煩惱、天魔外道を焼き尽くす火を体からお発しになる。これを火生三昧というのだな」

清姫の宝具は仏門の言葉だと説き起こす。

「その身を転じた結果が、一念不生、妄語うそごを許さぬ、火を吹く火竜と言うのなら、よろしい、清姫こそは不動明王が化身たる俱利伽羅竜王その人に相違あるまい。当の本人に自覚があるかは分からんがな。はっはっは！」

そんな風に、仏僧はひとしきり笑って、話を終えた。

そんなことを、ぐだ子は思い出していた。

器となった清姫の体から飛び出した火焰の竜王は、天上から下界を睥睨へいげいし、破邪顕正はじゃけんしょうの咆哮一声、急降下して、邪竜撃滅の攻に出た。

竜蛇相搏りゅうだそごはく。

毒蛇は躍り上がって、天降る火竜を迎え撃ち、両者真っ向からぶつかりあった。竜王は爪牙を敵する蛇体に激しく突き立て、片や蛇はその身を蠢かせ、絡みつかせて、ギリギリと相手の体軀を締め上げる。

竜王が火を吹きつければ、蛇もまた負けじと毒の炎を吐きかける。

当初、勢いは互角に見えたが、やがて浄火が毒炎を焼き尽くした。

たまらず悪しき蛇は悲鳴をあげる。

さながら怪獣映画のクライマックスシーンだ。

「そんな感想を一番に覚えるのは、自分が日本人だからかな」

オルレアンのファヴニールやウルクのティアマトを思い出させる大迫力。

我が事ながら、とんでもないことに慣れた物だと思う。

それらを越えていなければ、恐ろしくて、逃げ出していたかもしれない。

「言ったでしょう。『わたしも、武蔵ちゃんも、もっとすごい修羅場をいくつも潜り抜けて来たんだ』って。ここが踏ん張り所。だよね！」

大声で叫び、気合を入れる。

そして掲げるのは右手に刻まれたマスターの象徴。

切るのは鬼札。

「令呪をもって命じる。賦ふかつ活せよ。セイバー。続けて命じる！ 武蔵ちゃん！

あの分からず屋にガツッと一発、行っちゃって！」

「任された！」

号令一下、伏せられていた武蔵が、待ちわびたとばかりに、全力で飛び出す。

解放された令呪の魔力の後押しを受けた俊足をもって韋駄天走りに駆けに駆け、

竜王の吐息に、身にまとった毒炎を吹き剥がされ、むきだしとなった蛇の背を一足

飛びに駆け上る。

「いやあ。絶景かな。このデカさ！　いつぞやの鯨退治を思い出すわ。その時も暴れる巨鯨の背に乗って、こうやって刀を突き刺したのでした」

氣息を調べ、剣の柄を逆手に握り、えいやっと一息に突き下ろす。

「蛇殿。我が渾身の一刀、馳走つかまつる。御免！」

* * *

武蔵の一撃は靈核にまで達した。

蛇体を支える芯鉄しんがね、竜骨は千々に砕け、魔力もあらかた霧散してしまった。

「最悪の気分ですわ」

竜の姿を保てなくなった清姫が、心底苦々しい様子で吐き捨てた。

「何が不愉快って、こんなにも風いだ心で、さきほどまでの怒り狂った己の醜態を直視させられている、この状況ですわ。酷い方々、どうしてあのまま狂ったままに逝かせてくださらなかったの？」

蒼褪めた顔色は、魔力の喪失ばかりが原因でもあるまい。

「言ったでしょう。友達が道を間違えたなら、腕をつかんで引き戻してやるって。いや、こんなこと言われても、あなたは困ると思うけど。ここではない世界で、わたしは、清姫、あなたと友達になったんだ」

「ええ。本当に困ってしまいますわ。身勝手な方。わたくしは、貴女様のことなど何も知らないというのに」

「だよーねー」

平行世界の自分が死後、英霊として召喚され、戦いと旅を通して召喚者と絆を育むことになる。こんな話、客観的に見て胡散臭いこと甚だしい。私たちは前世でアトランティスの戦士だったと同レベルの与太話だ。

「ですが。本当の話なのでしょーね。だって現にそこにわたくしと同じ顔をした女性」

「あっ。そうか、そう解釈しちゃうかー」

「違うのですか?」

釈然としない顔。

「うん。違うんだ。でも、この流れだと、誰だってそう考えるとと思う。えっと、実はね……なんだかここへ来て一気に話がぐだぐだしてきたなあ」

きまりわるく頭を搔く。なんだか思っていたのと違う方向に話が流れだしたぞ。「あらためて名乗りましょう。初めまして、清姫、わたくしは不動明王が剣なる竜、俱利伽羅ですわ」

「竜王様？」

「悪竜の暴虐に苦しめられた衆生の救済を求める声に呼ばれて顕現したのです」

「それは……」

「聞きなさい、生きながら蛇道に墮した娘よ。わたくしは最初、あなたが先ほど望んでいたように、悪竜のまま討滅するつもりでした。わたくしの目には、もはや済度の術なきように見えたのです。曖昧の内にも何も分からぬままに死なせてやる。それがせめてもの慈悲かと思われました」

「ならどうして……！」

「如来の慈悲の大きいなるかな。大慈は時に非情に似たり。清姫、異界のあなたが築いた縁。無道なる悪しき蛇として、瞋恚の火に焼かれ、死んでいくことを良しとし

ない方が居たのです。そのお方を御仏は遣わされました」

「仏様はちよつと分らないけど。あのさ。わたしの世界でも清姫は蛇になって安珍を焼き殺したんだ。でもそこで終わり。最後はそのまま入水してしまつたって伝わってる」

「……その女は、きつとわたくしとは別人ですわ」

「かもね」

「愛が薄いんですわ」

「いやあ、あれ以上、重くなられてもなあ。本当はね、清姫、あなたが自殺しちゃつたのもわたしは悲しいんだ。多分、他にも同じことを思った人がいっぱいいたんだろうね。ずっと語り継がれていくんだ。あなたの悲恋を題材にして、多くの物語が作られる。千年以上経っても現役だよ。とんでもないことだと思わない？」

「だから、それはわたくしとは別の女の話ですわ」

「それでも！ 清姫さ、家族の事思い出せる？ 家族じゃなくても良いよ。安珍以外で何か覚えてる？」

「なにを馬鹿なことを」

「覚えてないんだね」

「それがなんだと言うのです」

記憶、感情、己のすべてを火にくべて、燃え尽きた成れの果てが、今の清姫であった。大切だったはずの物を失っても、その価値が分からない、だから心が動かない。それはあまりにも悲しかった。許しがたかった。

「みんなあなたの事が好きだったんだよ。あなたのことが大切で、忘れがたかったから、語り継いだんだ。それを忘れて、安珍のことだけ抱えて死んでいく？

冗談じゃない！」

言っている間に一層腹立たしくなってきた。

「なるほど。クリカラさんが言うように、ぶん殴ってでも正気に返すべきなのか」

「マスター、マスター、落ち着け、落ち着け」

変な方向に舵を切りかけたぐだ子を、見かねた武蔵が苦笑いしいしい、どうどうと馬でもなだめるように、落ち着かせる。

「いまちよっと笑ったでしょう。清姫」

「え？ ええ、だって、おかしいんですもの」

「そっか。そうなんだ」

「なんですよ」

「なんでもないんだ。こっちの話。ねえ、清姫、おなじことばかり言うようだけど、あなたは愛されてたんだよ。あなたが安珍を愛したように、あなたを愛した人もいたんだって、どうか覚えていて欲しいんだ。怒り狂ったあなたがしたこと、それが消え去ることはないけれど、あなたを好きだった人たち、それが消え去ることもまたないんだって。オマケで、怒りの炎が消えた後には、跡には何も残らない、そんな悲しい最後は許せない、そんな我儘な奴もいたって」

「……つくづく身勝手な方ですね」

「……うん」

「覚えておきますわ。その情熱的な告白。ああ、でも、どうやら終わりが迫って来たよう」

すでに清姫の霊核はひび割れていた。

ここまで持ったのが奇跡に近い。もしかしたら、運命とやらが、気を利かせたのかもしれない。

「さようなら。……あら、くすくす、おかしなこと、こんなに長々と話し込んでいたのに、わたくしついたら、貴女様の名前も知らないわ」

「ああ！ ごめん。相手がきよひーだから、すでに知っているつもりでしたよ。周囲からはぐだ子って呼ばれてる。それで本名は……」

最後まで伝えられたらどうか。

霊基の崩れる時に発する霊子の燐光の中に清姫は消えていった。

* * *

「夢か……じゃなくて、この現象、夢オチなのか現実なのか紛らわしいんだよなあ」
ベッドの上で目を覚ました。

枕に頭を乗せたまま、右手を上げて、手の甲を確認する。

「令呪は欠けてる。やっぱり現実にあったことか。あとで武蔵ちゃんにも確認しよう」

時計を見れば、普段の起床時間よりも一時間ほど早い。起きだすのも億劫だが、

二度寝するには時間が足りない。そうになると、布団の中でぼうっとするわけだが、色々と思考が空回る。

「結局、わたしがしたことってただの自己満足で清姫を苦しめただけなんじゃないだろうか」

愚にもつかないことを考える。答えが出るはずもないし、出たところで、どうしようもない。

「なんにせよ。きよひーの心が、少しでも救われただろうか。その一助にでもなっていたら良いのだけど」

するとベッドの下から声が出た。

「覚えていますわ。あれほど情熱的な愛の告白でしたもの……きゃっ清姫ちゃん、照れちゃう」

「ええ！」

<了>

P i x i vとの二重投稿になります。

同サイトで2018年12月15日から2019年1月13日にかけて連載した物を加筆修正しました。

林檎の聖者

林檎の聖者 01

西部開拓期の伝説的人物ジョニー・アップルシードの物語を題材に、エジソンとマッシュを伴ったぐだ子が北米大陸に再び生じた特異点修復に挑む5章と6章の間にあつたかもしれない物語。

老人がひとり、荒れ地に林檎を植えていた。

未だ人の手を覚えぬ渴き果てた土地である。植木が根付き、枝葉を茂らせ、瑞々しい果実を結ぶことは稀であつた。それでも男は林檎を植えた。十の種が芽吹かなければ百の種を蒔き、千の苗木が根付かなければ、万の苗木を臆さず植えた。彼はずっと林檎を植え続けてきたし、これからも植え続けていく定めにあつた。

それは祈りだつた。無辜たる万衆の想念が凝つた憎悪にも似た祈りである。

彼は信仰者だった。彼は英雄だった。彼は怪物だった。



「舞台は1845年のアメリカ。人物は、そうだね、一言で言えば『林檎の聖者』つてところかな」

「ジョブズ？」

「いや、違うよ？ というかその人は聖者っていうよりは伝道者エバンジェリストじゃないかなあ。

第一、1845年って言ってるよね!？」

「サーヴァントが自分が生まれるより前の時代に召喚されるのって普通のことじゃないですか」

「そうだけど。そもそも英霊の座にいるかなあ、いるかもしれない、うーんだんだんいそうながしてきたぞ！」

「お二人とも、話がずれています」

独立戦争さなかのアメリカに発生した第五の特異点、その攻略からしばらくし

て、ぐだ子たちはドクター・ロマンから呼び出しを受けた。既におなじみとなった観もある、新たに発見された小特異点修復のオーダーとレイシフト前のレクチャーである。

その際に、事前の観測で明らかとなった、これから向かうことになる特異点の焦点と目される人物を一言で表す言葉としてロマンが用いたのが『林檎の聖者』というものだった。

「第五特異点での『鋼鉄の白衣』ナイチンゲールさんみたいなものですね」

「そうそう」

マシユの言葉に我が意を得たりとニンマリする。

ピツタリの名前を見つけたぞと得意になっているのが透けて見えるようだった。相変わらず胡散臭い恵比須顔だなあ、とぐだ子は思ったが口には出さないでおいた。

「聖者というとゲオル先生のような方でしょうか。あるいは聖女マルタ？ はて林檎の逸話を持つ聖人というと、どんな方がいましたか」

よもやアダムとイヴではあるまいし、と独りごちつつマシユが首をかしげる。

「ああ、ごめん、聖者というのは比喩って言うか、聖マルタや聖ゲオルギウスとは違って、正しく列聖された『聖人』ではないんだ。民衆から聖者とみなされる人物って言うのかな、さしずめ20世紀初頭に列聖されることになる前のジャンヌ・ダルクみたいな感じ……で分かってもらえるかな」

「なんとなく分かります。というかジャンヌ、聖女になったのそんな最近だったんですね」

ぐだ子はうなずいた。無冠の帝王みたいなものだろう。だいぶ違う。

「それで、どういう人なんです？」

「うん。彼はね木を植えたんだ。林檎の木を——」



「それでレイシフトして早々に見つけたのがあの御老人ですが」

「うん。ビックリするくらいすぐに見つかったよね」

レイシフトが完了し、目を開いたら、老人が荒れ地に種をまいているのに遭遇し

た。ぐだ子にはそれが林檎の種かどうかは分からなかったが、この流れでまったくの無関係の老人だとも思われなかった。

「それにしても……」

出かかった言葉は形をなさずに虚空に消えた。色々と感じる所はあるのだが、どうにも上手く言葉にできなかった。

異様な風体の老人だった。

髪も髭も伸び放題に伸び、肌は日の光と風雨に磨かれた赤金の色。背は低く痩せているが頑健そうに見えた。

まず第一に目を引くのは体を包む麻袋である。底に一つ、側面に二つ、適当な穴をあけた檻褌のコーヒー袋を逆さまに被って胴着の代わりにしているのだ。

ズボンもくたびれてすりきれていたが、それでもズボンには違いない分、老爺の服の中では一番マシであったかもしれない。

健脚を支える履物も、右は革靴でもう一方はサンダルと左右でチグハグだったし、ごま塩頭に被っているのは粥を煮る小鍋に違いない。

映画の中の記号化された浮浪者でもまだ立派な衣装を着せてもらえるだろう。

しかし不思議と小汚く垢染みた印象は受けなかった。

感じるのはむしろ聖性を帯びた清涼感である。老人は荒野に住まいする隠遁生活者の風格を持っていた。

異様な迫力にカルデアの一行は圧倒された。中でも一番激しい反応を示したのはこの男だった。

「私はいま猛烈に——！」

「先輩。エジソンさんがふるえています」

「そうだね。それもこの感じはただ驚いているというより……」

「——感動している！」

メンロパークの魔術師^{キャスター}、トーマス・アルバ・エジソンが獅子吼^{ししこ}した。異形の獅子頭^{ししがしら}を男泣きに歪ませ、ダバダバと随喜の涙を流す怪人の姿がそこにはあった。

元来が激情家で大仰な男であるが、英霊の召喚と契約以来、彼のマスターとなつたぐだ子をして初めて接する度合いの興奮振りだった。

これを越える激発は、天敵と角突き合わせる時くらいであろうか。

「あれ、だとすると結構あるくない？」

「しっ！ 先輩、エジソンさんはきわめて真剣に感動していらっしやいます。茶化すのは後にしましょう」

最近、後輩の対応が塩になってきたなあと思うぐだ子である。そんなことを呑気に考えるくらいには蚊帳の外であった。

「まさか、まさか！ 開拓の英雄、荒野の聖者、かのジョニー・アップルシードとあいまみえることができようとは！」

衝撃波でも伴っているのではと錯覚するほどの耳を聳する大音声である。その叫びは植樹を続ける老人の耳にも届いた。

しかるに、老人は豪胆であった。

「やあ、ライオンさん、こんにちは。それにお嬢さんたちも、はじめまして。どうやらあんたがたは儂を御存知であるらしい。たしかに儂はジョニー・アップルシードと呼ばれる爺だ。間違っても聖者ではないし、英雄でもないと思うがね」

一面見渡す限りの平野に唐突に現れた一行の不自然さや、エジソンの異貌をすら気にした風もなく、無造作に近づいてくると、年老いた男は気さくに挨拶を寄せた。

「神様に感謝を。今日はとても素晴らしい日だ、新しい友人との出会いはいつだって新鮮な喜びを運んできてくれる、そうは思わないかい？　しかし、はて、不思議なことだ。ライオンさん、あんたとは初めましてのはずなんだけど、なんだか懐かしい気配がするよ」

老アップルシードは鼻をひくつかせた。くんくんと匂いをかぐふりをする。皺だらけの顔を嬉しそうに歪ませる。すると途端に愛嬌が生まれて、先刻までの神懸かった雰囲気が霧散する。

どこまでもカラっとした陽性の空気が振りまかれた。

「私はエジソン。アメリカが生んだ史上最大空前絶後の大天才トーマス・アルバ・エジソンである。老アップルシード、どうぞお見知りおきをいただきたい」

エジソンは憧れのヒーローに出会った少年の振る舞いで、食らいつかんばかりに自己紹介を行った。自然、彼の異形の理由にも話は及ぶ。

「ほほう。歴代の大統領がねえ。それはなんとも突飛な話だ。だが、なるほどたしかに。こいつはワシントン将軍にジェファークソン、モンロー、ビュレーン、ハリソン、それに孫の方のハリソンもいるな。どれもこれも儂の素晴らしき友人たちの気

配だ」

歓談する二人から少し離れたところで聞いていたマシユはおやつと思った。

「先輩、どう思われます？」

「ワシントンとジェファースンは知ってる。大昔のアメリカの大統領だよ。後ろに続いた人たちもそうなのかな？」

「はい。初代ジョージ・ワシントンから、おそらく孫の方のハリソンというのは第23代ベンジャミン・ハリソンのことかと思われます。彼は第9代ウィリアム・ヘンリー・ハリソンの孫でもあるのです。ですが、これは大変奇妙なことであるかと」

「奇妙？ ……あっ！ 23代って言った？」

「はい。第23代ベンジャミン・ハリソンの任期は1889年から1893年です。そして我々が飛んだのは、事前のレクチャーによれば1845年のアメリカは、ジョニー・アップルシード物故の地と伝えられるインディアナ州フォート・ウェインです。そのはずですよ」

「時代が離れすぎてるね。あ、こういうのはどうかな、お爺さんが交友を持ったのはそれぞれ晩年のワシントンと紅顔のベンジャミン少年だったっていうの」

「なるほど。たしかにそれなら矛盾はありませんね。それで先輩、実際の所はどうお考えで」

「うん、自分でも信じてなかった。あーっていうか、私、いまもっとおかしなことが起きてる可能性に気づいちゃったかも」

「なんでしよう」

「今って何年？」

「えっ？　ですから1845年と……まさか」

『1783年だ。君たち、なんでそんな時代にいるんだ！』

カルデアからの緊急通信が割り込んできた。

ぐだ子とマシユは二人して目を丸くすると互いに顔を見合わせた。しばし視線を交わした後、ぐだ子が代表してロマンに質ただした。

「つまりベンジャミン・ハリソンどころか、まだ大統領なんて物はこの世には存在していない？」

『そうなるね。なんでいきなりベンジャミン・ハリソンなんて出てきたのか分からないけど』

「ドクター。どうして六十年も時代がずれたのでしょうか」

『すまないマシユ。正直、まるで分からぬ。けど時代が時代で場所が場所だ、第五特異点の余波と考えるのが妥当じゃないかと僕は思う。君たちは現在、当初の目的地のインディアナ州を大きく外れた西海岸のカリフォルニア州、その時代だとスペイン領カリフォルニアになるのかな、そこに出てしまっている。しかし、まあ、事前の観測だとジョニー・アップルシードが今回発見された特異点の焦点だと出てたんだが、その時代の西海岸になんて彼がいるはずがないぞ』

「ジョニーさんならそこでエジソンと話してますよ」

『えええー！ ちょっと待って、意味が分からない、どういうこと？』
「こつちが知りたいです」

荒野にドクター・ロマンの驚愕の叫び声がこだました。

林檎の聖者 02

『こちらでも確認した。たしかにジョニー・アップルシードの伝承そのままの姿をしたお爺さんがいるね』

エジソンと談笑する老人を通信窓越しに、冷静さを取り戻したドクター・ロマンが所見を述べる。

ぐだ子たちはジョニー・アップルシードに同行していた。植樹を続ける老爺に導かれ乾いた大地を進んでいく。

『あまりにも「らしすぎて」仮装を疑うレベルだけど、その時代はまだジョニー・アップルシード伝説が生まれる前だから、騙りや自分をジョニー・アップルシードだと思い込んでいるっていうケースは除外していいと思う』

「そうすると、あのお爺さんは本物のジョニー・アップルシードさんだと考えて問題ないの？」

『そうだね、疑問は尽きないけど、ひとまずは、そうと考えて対処すべきだと思う。いるはずのない人間がいるっていう所には……ここは一つ目をつぶろう』

ロマンは軽くおどけた感じに目を細めると——きわめて苦笑に近い微笑だった——そう言葉を結んだ。

またの名を柵上げである。

「了解。エジソン、むちゃくちゃ興奮して喜んでるし、それが実は偽物でしたーなんてことにはならなさそうで良かった」

『ははは、ブリーフィングの時から、すぐく張り切ってたもんね、彼』

その時の様子を思い出したのか、痛快とばかり笑い声をあげた。一転して朗らかな、本心からと分かる陽性の声色だった

どこで聞きつけたのか、ブリーフィングの開始も早々に乱入してきたエジソンは、今回の特異点に自分ほど相応しいサーヴァントはいない旨の演説を一席ぶちあげながら、盛んに売り込みを掛けてきた。

「ジョニー・アップルシード！ さよう。彼こそはヴァンガード。開拓者たちのその先に立ち、フロンティアを切り拓く者である。そして私はエジソン！ 発明の荒野を切り拓きし者である」

それとこれとに何の関係があるのか、聞いた人間の誰ひとり分からなかったが、

そのタフなネゴシエーションはまさにアメリカン。強引にして横車。我田引水の極みながら不思議と憎めない。

生前もその勢いでバシバシ訴訟をばらまいていたのだろう。すさまじいバイタリティであった。

「たしか昔話の主人公なんだよね」

ぐだ子は知らなかったのだが、ジョニー・アップルシードはアメリカ人なら誰もが知る昔話の主人公であるという。

生まれながらのアメリカ人であるエジソンが、幼いころからその物語に親しんできただろう事は想像に難くない。

ぐだ子の故郷の日本で言えば、さしずめ笠地蔵の老翁や竹取の翁、花咲か爺さん等が相当するだろうか。

「それは会ってみたい。うん、当然だよ、おとぎ話の住人と知り合う機会があったら、私だって行ってみたいよ」

ぐだ子は大いに共感した。

「ロンドンで金太郎と出会ったけど、やっぱりテンションの上がり方が、それまで

出会ってきた英雄偉人の皆とは、また一味違ったものがあったよね」

そんなことを言う。

そこへ、かわいらしい女の子の声相槌を打つ。

『そうよ。フェアリー・テイルはとっても素敵なんだから』

「ナーサリー」

『ごきげんよう、マスターさん。ええ、そうよ、わたしは^{ナーサリー・ライム}わらべうたの化身。聞いたのだけ。なんだかとっても素敵で楽しい出会いがあったのですって』

声はすれども姿は見えず。カメラの死角に立っているのだろうか。きやらきやらと笑いながら、少女の声がおねだりをする。

『わたしもその子と会ってみたいわ。ねえ、マスターさん、そちらにご招待いただけないかしら』

童心の凝った存在である彼女にとっても、出自を近しくするジョニー・アップルシードは興味を引く存在であるらしかった。

『ジョニー・アップルシード。新大陸の男の子。その子は人間？ それともわたしと同じで物語？ どちらなのかしら。きつとどちらでも素敵なのだけ』



「それで、我らがドクター・ロマニ・アーキマンとしては、どうお考えなのかな？」
「意地が悪いぞ、レオナルド！ 彼は人間だ。間違いない。それは君にだってわかるだろう」

「まあ、そうだね。サーヴァントにしては魔力が微弱にすぎるし、デミ・サーヴァントともまた違う。肉体面でも頑健で健脚だがそれも常識の範疇だ。サーヴァントの超人性は見受けられない。諸々のパラメータはすべて一意に……」
「そう彼が人間だと訴えている。だが、どこか、不自然さがぬぐえない。強いて言えば第二特異点に於けるネロ皇帝に感じた違和感と似ているかな」



「素晴らしい！ うむ、実に素晴らしい！ 先ず何が素晴らしいって私の発明で

ある——ここ重要だからね！——映画ということが素晴らしい。その上で作品の内容も非常に良かった」

スタンディングオベーションとともにエジソンは吼えた。

映画は自分の発明品。エジソンの中ではそういうことになっていた。黎明期の映画関係者の英霊が聞けば、疑いもなく殺害計画を練るだろう。

時間は少し巻き戻る。

レイシフトに先立って行われたブリーフィングでの一幕。職員の慰安の為に収録されていた映像資料の中から掘り出された古いアニメ映画の上映会での事である。「こほん。さて、これで、ぐだ子ちゃんにもジョニー・アップルシードの概略については知れたかと思う」

「映画の中で木を植えて回っていた人がジョニー・アップルシードってことで良いんだよね」

たしかに書類片手にあれこれ説明されるより分かりやすかった。

「その通り。彼はね木を植えたんだ。林檎の木を西部の荒野に一本一本植えていった」

ジョニー・アップルシード
林檎種のジョン。

本名ジョナサン・チャップマンは、18世紀後半から19世紀前半にかけて活躍した実在した伝説的な西部開拓者で、アメリカン・トールほらばなしテールの著名な主人公である。

アラモ砦の英雄デイビー・クロケットや巨人ポール・バニヤンらと並んで親しまれている。

「だが彼には他の開拓の英雄たちとは決定的に違う所がある」

西部の開拓者にはつきものの血なまぐさい、荒っぽい逸話が一つもない。他の開拓神話の主人公たちが、絶えず抗争を繰り返した先住民たちもジョニー・アップルシードの友人だった。

「彼は土地に執着しなかった。林檎の木がしっかりと根付くと、惜しげもなく後からやってきた入植者にそれを譲り渡して、さらに先へと進んでいった」

何か思う所があるのか、説明をするドクター・ロマンの言葉の端からは少なからぬ敬意の存在がうかがえた。

開拓は孤独な作業である。そんな時に開拓者たちが目にした一本の林檎の木が、

どれほどの勇気を与えてくれただろうか。それは実際には開拓に失敗した無数の先行者が残した痕跡だったのだろう。しかし開拓者たちはそこに一人の偉大な開拓者の後姿をかいま見たのだ。

「西部開拓の時代である」

ロマンの言葉をエジソンが引き取った。

「そう開拓だ。なんと美しい言葉だろうか。だが、やはり、どこか後ろ暗い所があるのは皆分かっていた。いかなる美辞麗句を駆使しても、一面においては紛うことなき略奪と虐殺ではあったのだ。現実にフロンティアに立つ人間は日々戦いであるから、そんな甘っちょろいことは言うてはおれんが、もはやフロンティアではなくなった土地に暮らしてみれば、過去を振り返る余裕も出て来る。そうするとどうか、インディアンの征伐譚はいささか剣呑に過ぎると思えてきた。人間は自分の先祖は正義に叶う善なる存在であったと信じたいのだよ。彼は開拓者の、否、アメリカ人全体の罪を一身に引き受けた存在だと言えよう」

そうして生まれたのが信仰を胸に、無私の心で林檎を植え、インディアンに尊敬される荒野の聖者の伝説だった。

「ジョニー・アップルシードはアメリカのキリストなのだ」

いつになくしんみりとするエジソンに、なんと言葉を掛けた物かとゞだ子は迷った。しかしそれは明白なる杞憂。いつだってエジソンは傲然たる偉物^{えらぶつ}である。

「だがしかし！ それでも私は声高らかに叫ぼうではないか。アメリカ万歳！

開拓者^{フロンティア・スピリット}魂よ永遠なれ！！ と」

林檎の聖者 03

黄金の林檎と呼びならわされる物がある。

曰く、不死の源、神々の食する天上の妙果。

北欧はアース神族の女神イズンの果樹園や、トロイア戦争の発端となったパリスの審判に登場する諍いの女神の林檎を筆頭に、各地の神話で語られる絶大な呪力を秘めた黄金の果実である。

『残念ながら現代の魔術師の技術だと、力を取り出す際に大半が雲散霧消しちゃうけど、それを考慮にいれても複数基の英霊を数週間から数か月は現界させておけるぞ』

「それはすごい」

ぐだ子は目をみはった。カルデアの電力リソースを半分傾けて維持していることを一個の果物が賄えるという。驚くべき話だ。

『魔術的に言うなら聖杯に準じる魔力の塊かな。要は天然の魔力電池。それが人間の眼には光を放つ果実として認識されるってこと。中国の神話でいう西王母シーワンムーの蟠桃パンタウ

や、ぐだ子ちゃんにも馴染みのあるところで非時香木実トキジクノカゲノコノミなんかもこれの一種だろうね……あ、知らない？ そっかー』

気を遣って「これなら相手にもわかるだろう」と例をあげ、かえって気まずい空気を作る、とてもよくある光景であった。

「マシユ、知ってる？ そのトキジクなんちゃら」

「はい。先輩。トキジクノカゲノコノミです。一般教養の範疇ではないのでご安心ください。マイナーです。サブカルです」

大真面目な顔で断言するマシユ。ただし彼女には先輩を無条件で肯定する傾向があるので注意が必要である。

「非時香木実トキジクノカゲノミは日本の古い歴史書の『日本書紀』や『古事記』に登場する不老不死の靈草で……すみません。先輩の母国の正史に記載された事物を指して、さきほどの下位文化サブカルチャーは言い過ぎでした。むしろハイカルチャーであると考えます。でもマイナーですから！」

『あ、そこは譲らないんだ』

「話を戻します。時の帝が廷臣の田道間守タジマモリに命じて常世の国——スカサハさんが治

める影の国に類するこの世ならぬ他界です——から持ち帰らせました。その正体は橘タチバナではないかとも言われていて、そうだとすると、ドクターがおっしゃったように、これは確かに黄金の林檎であると言えます」

橘は日本固有の柑橘類である。柑橘類の常として、その色は黄色から橙色をしている。

「ミカンなのにリンゴなの？」

『林檎は果実の総称くらいに考えてよ。今君が蜜柑で柑橘類を総称したみたいになさ。もっと言えば植物全般くらいまで広げてくれて良い。こんなこと、今まさに林檎の形をした黄金の果実を目の当たりにしている君たちに言うのも何だけどね！』

「そうなんだよねー。ジョニーさんの伝説って黄金の林檎が関係するのかな？」

「先輩も薄々分かった上でお尋ねであると察しますが、答えはノーです。ジョニー・アップルシードの伝説は優れて宗教色の濃い物語ですが、それは倫理的な話で、天使のお告げのような潤色がなされることはあっても、神秘の介在する余地はありません。彼はあくまでも人間であり、林檎もまた全て普通の林檎です。黄金が許されるのは林檎酒シードルであって、生の果実のその色は赤か青であるべきです。ですから、こ

の光景は何もかもが間違っています。これではまるで……そう、まるで……」

「さつきドクターが話してくれたイズンの園だねえ」

オールド・ジョニーに誘われ、カルデアの一行がたどりついたのは荒野に拓かれた林檎園であった。

黄金の輝きを宿す瑞々しい林檎のたわわに実る園である。



「光輝く林檎の林とは、誠にもって絢爛豪華な電飾の極みである。果たして如何程の電力が使われているのか。さしもの私も戦慄せざるをえないな。……何、他愛もないジョークではないか、マスターにマッシュ嬢も、そんな白けたような目を向けてくれるな」

「だって……ねえ？」

「はい」

「むむむ……何だね、その意味深な目くばせは」

「いまさら強調してくれなくても、エジソンがデンキの発明者だってことくらい誰だって知ってるんだから」

ここでいうデンキとは電灯の事である。

「ふむ？ ああ、なるほど。少々誤解があるようだ。誠に遺憾ながら、電球それ自体は私の発明品ではないのだよ、マスター」

「そうなの！」

子供のころ読んだ児童向け伝記では、エジソンが電球を発明し、その際、フィラメントには京都の竹が使われたとなっていた。

「いかにも。電球を発明したのは……いや、誰が最初に発明したかなどというのは些事も些事。重要なのは、その時点ではまるで使い物にならなかつたガラクタを、実用に耐えるレベルにまで改良してのけたのがトーマス・エジソンであるという事実だけだ」

傲岸不遜に言っただけのける。心底から自分の偉大さと正当性を確信しているという態度だった。

「なあに、元より、金属の細い線すなわちフィラメントに電気を流すと光を発する

ことは、私が生まれる半世紀ばかり前、ボルタ電池の発明からほどなく発見されていたのだ。それも道理だろう。更に先立つこともう半世紀、雷の正体が電気であることはフランクリンの凧の実験によりとくに証明されていたのだからね。電池という安定して電気を得る手段を手にした人類が、そこから光を取り出そうと試みるのは自明というもの。私もまたその偉大なる事業に挑んだ冒険者の一人であり、誰もが手に出来る商用の電球という形で、一つの解答を示して見せた。これはそういう話なのだよ。その白熱電球も2016年現在では発光ダイオード^Dなる物に入れ替わりつつあるようだが、聞けば発明者はウチの会社に勤めていた人間と言うじゃないか。で、あれば、これもまあ半分は私の功績と言っても過言ではないだろうね！

「過言だ、過言」

ちよつと感心したのにすぐこれだ。

「はっはっは、冗談だよ冗談、三割くらいはね」

「半分どころか七割も本気だったかあ」

「私は創業者だぞ」

真顔で断言する。最近めつきりとライオンの表情が読めるようになってきたぐだ子である。動物会話を習得する日も遠くない。

「それに私には人の世より夜の闇を駆逐したという自負がある。私が電球と発電所の普及に力を尽くさなければ、科学の進歩はずっと立ち遅れていた。間違いない。しかるに、あの図に乗ったヒョーロク玉は現代のプロメテウスなどと僭称しているようだが、とんでもない話である。私こそ現代の……否！ 19世紀以来のプロメテウスその人である」

『あはは。でもそれメアリー・シェリーの剽窃だよね』

「シャラップ！」

「……どうしてドクターはわざわざ言わなくても良いことを口にするのですか！ それは私もフランさんのお父様の異名ではってちょっと思いましたけど！」

「マッシュ嬢、君もかね！」

「ああ。なるほど」

ポンと手を打つぐだ子。ロンドンでの出来事を契機に学習したのだ。通常『フランケンシュタイン』と呼ばれる小説は、その正式な題名を『フランケンシュタイン

あるいは現代のプロメテウス』と言った。



「ねえジョニーお爺さん」

林檎畑の手入れに勤しむ老人に、ぐだ子は話しかける。

「なんだいお嬢さん」

「ちょっと聞きたいことがあるんだ」

「ほいきた。なんでも聞いておくれ」

「このおかしい……じゃなかった、ユニークな林檎はお爺さんが作ったの？」

「はっはぁ。なるほど。うん、そうとも。みんな農が丹精込めて育てた林檎たちさ」

ジョニー・アップルシードは微笑むと、陽に焼けて皺の入った指先で、林檎の樹皮をやさしく撫でさすった。

「だからって、遠慮はいらない、構やしないさ、なんてったってきらきら光る林檎だもの、誰が見たって珍妙奇天烈な代物だ、違うかい」

「あはは。いつから、この金色の林檎を植えているの?」

「はてな、いつと問われてみてみれば、ふうむ、奇妙なことがあるもんだ、これがとんと思い出せない」

思いがけないことを聞いたとばかり、ぴたりと止まり、目をしばたかせる。はぐらかしているわけでもなく、真実思い出せない様子だった。

「さあて、あれはいつだったか。百年も前だったようにも思えるし、昨日のことも思える。けれど、ひとつだけ覚えていることがある。この林檎を儂に授けて下さったのが、天使さまだってことさ」

「天使!」

思いがけない言葉にぎょっとして、ぐだ子は調子の外れた音程で、鸚鵡のように返すのがやっとであった。

そういえば、さきほどマシュが「天使のお告げのような潤色がなされることがある」と言っていたが、これがそうなのだろうか。

考え込むぐだ子にマシュがそっと耳打ちする。

「先輩。悪魔はしばしば天使の姿であらわれると聞きます」

「魔神柱？」

「その可能性は十分に考えられるかと」

「儂は昔から、うんと幼い子供の時分から林檎の木が好きだった。大人になって、大学で学んでいても、いつも心には林檎の木があった。この大陸のすべてが林檎の木で満たされたらどんなに素敵なことだろうか。夢はどんどん大きく育ち、いまにも儂の胸ははちきれそうだった。そんな時に、神さまが、天使さまを儂のところ遣わしてくださいだった。黄金に輝く林檎を持たせて。儂は確信した。儂がこの世に生を受けた意味を。この黄金の林檎をもって世界を満たせ、と神さまがそう命じられているんだと」

ひそひそと話し合う二人を尻目に、ジョニーの言葉は駆け足で熱を帯びていき、独演会の様相を呈していた。そして、そんな空気を気に留めず、独演会に独演会をぶつける男がいる。

「なるほど！ 実に気宇壮大なる大事業である。私もまたザラスシュトラの光焰の如き文明の光をもって合衆国を、否、地球上のすべてを照らさんと企図した男だ。分かる、分かるぞ、夢は大きければ大きいほど、株価は高ければ高いほど、心と懐

を暖かくしてくれる。しかし、だとすると、ミス・ジョニー。不躰な質問で恐縮だが、大陸を満たすという目標からすると、さしものこの広大な果樹園でも荷が勝ちすぎているように思えるのだが、その点はどう解決される予定なのかな」

金の卵ならぬ林檎を育てる生産者である。流通面で一口かめれば膨大な富が生まれる。そんな皮算用を立てていた。

「うん？ ああ、そうか、ライオンさん、あんたはこの林檎園で全部だと思っていなさるんだね。そうじゃないんだ。ひとつじゃないのさ。儂はずっとずっと東から、林檎を植えて、園生を造り、軌道に乗ったら人に託して、ずっとここまで歩いてきた。東海岸から西海岸まで大陸を横断する林檎の道さ」

「なんと」

「そしてそれももうじき完成する。一朝一夕ではないにせよ、儂も使命もそこで終わりだ」

林檎の聖者 04

「ジョニー・アップルシードに林檎を授けた天使の正体は魔神柱だと仮定して、その目的は何だろうか？」

ぐだ子はそう問いを立てた。

「林檎を大陸中に拡散させることでしょうか」

「かなあ」

ひとまずはそう考えて構わないだろう。

『アップルシードは文化英雄だ。荒野を開拓し、林檎をアメリカ全土に行き渡らせた逸話を持つ。生前の彼が実際に活動した範囲は東部のごく限られた範囲と時代でしかないけど、後世の英雄譚、ホラ話の中では彼の足は西海岸まで届いているし、アメリカの林檎は全て彼が植えたもの、その子孫たちだ。林檎をひろめるのにこれほど打って付けの人材はいないだろうね』

「なるほど」

「その通りかと思えます」

「じゃあ、次の疑問だ。黄金の林檎がアメリカ中に拡がると何が起こるの？」

『話は聞かせてもらった』

「ダ・ヴィンチちゃん」

『結論から言おう。アメリカは独立しない』

「な……なんだってー!! ……で、どういうことなん？」

「アメリカが独立しない。とのことですが」

『そう。少なくとも合衆国という形ではね』

「するとどういふ影響が？ アメリカが存在しない世界とか想像もできないけど」

『レオナルド。僕もおおむね同意見だが。過程をすっ飛ばして結論まで一足飛びに飛躍するのは、君たち天才の悪い癖だぞ』

『む。それは失敬。そうだね。影響は多岐に渡るものと考えられるけど、直近の大事件としてはフランス革命が起こらない可能性がある。またアメリカを失わなかったイギリスはインドや中国に進出する意欲をそれほど示さないかもしれない。とすると大英帝国の位置には別の国が滑り込むかもだ』

「歴史改変SFみたいですな」

『ははは。たしかにそこまで考えだしたらほとんど思弁小説の世界だ。キリがないね』

ひとしきりロマンは笑うと、解説を引き継いで、脱線しかけていた話を本筋に戻した。

『まず前提としてアメリカ独立戦争は国際的な戦争だったってこと。植民地と宗主国の間で起こった反乱ってだけじゃない。むしろその本質は七年戦争を制し、ヨーロッパの最強国への道を歩みだしていたイギリスに対する、フランスが音頭を取ったのヨーロッパ一丸の報復戦争だった。イギリスは国際社会の圧力に負けたんだ』
「なるほど。それで？」

『その国際社会が、黄金の林檎——不老長生の霊薬を、植民地の平民たちが独占することを認めると思ukai』

「あー無理っぽい」

実際、この特異点では林檎の存在が知られるやいなや、それまでの援軍がたちどころに侵攻軍に早変わりしたのだった。

加えて、史実でのイギリスの敗因は、遠征ゆえの物資の不足と傷病による兵員の

損耗だった。黄金の林檎の存在は、それらのほとんどを解決してくれていた。

くわえて、恐ろしい事実が明らかになっていた。

『その戦場では人が死なない』

「はい？」

『文字通りさ。死なないんだ。黄金の林檎がある限り、手がちぎれようが、足がもげようが、兵士たちは復活する。恐ろしいことに肉体の損傷だけじゃなく、心の傷まで癒している節がある』

「ここへ来てまさかのゾンビ物！ ヘッドショットの定番ですか」

『そうそうゾンビにはヘッドショットって……死んでない。死んでない。ゲームで言うゾンビアタックめいた戦法は行われてるみたいだけど、あくまでも生身の人間だからね。どっちかと言うとイメージとしては北欧の大神の神兵エインヘリヤルが近いかもね。地上に現出したエインヘリヤルとか、ゾンビ以上のこの世の地獄以外の何物でもないけど』

黄金の林檎の存在が、戦闘を加速させていた。すでに一部では剣と槍で切り結ぶ古代さながらの戦闘が行われているありさまだった。



「大陸の東から西までアメリカ全土を黄金の林檎が満たしているときたか。さしずめ古典時代の詩人が謳いあげた黄金時代と言ったところだね」

大神クロノスの統治の下、人は不死でこそないものの老いることなく病みもせず安楽のうちに長生を謳歌した伝説の時代さながらの光景が広がっているはずだ。

「時間があればスケッチの一枚も残しておきたいところだが。あいにくと住人の方は鉄の時代の人間たちだ」

「奪いあい。なんだろうなあ」

「間違いないね。このダ・ヴィンチちゃん特製『カルデアボーイズセレクション』のカタログを賭けてもいい」

「それは要らないけど。……ふむふむ。レオナルド一推しは彼なのか。意外なようなそうでもないような。ねえ、なんで、僕は入ってないんだい？」

不要と言いながら、差し出されたカタログを素直にめくる。

「ロマニ・アーキマンは人間だからなあ」

「それは残念」

すげないダ・ヴィンチの言葉に、裏腹に嬉しそうに微笑むのだった。

そこへスタッフからの報告が上がる。

「各地で中小規模の戦闘が複数観測されました。それも大陸軍と英国軍間だけではありません。大陸軍対大陸軍、英国軍対英国軍、先住民族や第三国の植民地入り乱れての混沌とした状況です。事前の予想通りです」

「ああ、やっぱりか。ありがとう。林檎は林檎でも不和の林檎の方だったみたいだね」

「最初から分かりきっていた話じゃないか。あんなものがあつたら、それは各地で軍閥と化すとも。ダイヤモンド鉱山なんでものの比じゃない」

等しく分け合えば皆に行き渡る十分な数があつたとしても、それができないのが人間である。失われることを恐れ過剰な備蓄に走る者。買い占めることで市価を釣り上げ財貨を得ようと目論む者。

ましてや物が不老長生の万能薬である。その産地を独占し、供給を握ってしまえ

ば、古今類例のない強固な権力の出来上がりだ。

自分たちが支配下に置いた林檎園以外を焼き払ってしまおうと企む者も出るだろう。

「待ってください！ 英霊、サーヴァント反応です！ 数は一騎。ぐだ子ちゃんたちの所へ近づいています！」



「見えてきたぞ。もう一度確認しておく。標的はジョニー・アップルシードなる怪物だ。これを捕縛し、本隊に連行する。それが叶わぬ場合は射殺する。ただの癡狂の老人と侮るな。奇怪な妖術を使うという情報もある」

果樹園に近づく騎馬の一隊があった。馬匹の数は十騎ほど。揃いの軍服姿で、イギリス軍の一団だろう。その中に、ひとり異彩を放つ男がまぎれていた。いまだ少年の面影を強く残す男である。

「おい。ピストル使い、貴様もそれで良いな」

隊長が念を押す。

「了解。その時までには大人しくしておくよ。早撃ちは得意なんだ。隊長さんも知ってるだろう」

掌をひらひらと振り気楽な声音で受け合った。

その姿は典型的な荒野のガンマンであった。だが、この時代からするといささか新しすぎたのは否めない。事実、彼が活躍するのは一世紀ほど後のことである。

「けどね。どうやら向かう先にいるのはそのお爺さんだけじゃないみたいだよ」

「老人と少女が二人に……なんだあのライオンの顔の怪人は。マスクではないのか」「隊長さん。下手に突っかからない方が良いと思うよ。どうやら彼ら僕の御同類らしい」

「サーヴァントとかいう怪物か」

「怪物は酷いな。とりあえずライオンマンと盾の少女の二人は確定かな。御老体はちょっと怪しいけど、もう一人の女の子は人間なんじゃないかな」

ガンマンは一人馬を進め、四人のそばに近づく。

「やあ！」

朗らかに呼びかける。

「僕の名はビリー・ザ・キッド！ ガンマンと言いたいけれど、何の因果かアサシンのサーヴァントさ！」

その名乗りは最後まで聞き取れなかった。

銃声が掻き消したからだ。

顔色一つ放たれた、和やかな雰囲気のさなかの銃撃だった。

「ひゅーっ！ すごいねキミ！ もしかして僕が撃つのがわかってたのかい？」
悪びれることなく銃弾を防いだマッシュを称賛する。

マッシュがそれに応じることはなかった。硬い表情で狙われた自分のマスターに警告する。

「お気をつけを先輩。あの方は！」

「うん。わたしたちの知ってるビリーとは別人みたいだね」

北米神話大戦の渦中で出会い、共闘したアーチャーのビリー・ザ・キッドが西部劇のヒーローならば、ここにいるのは西部劇の悪漢ヴィランであった。

「ぐだ子が武蔵ちゃんの幕間にレムレムしたら本当はきよひー（オルタ）の幕間だった話」他1話

著者 琵琶湖くじら

発行日 2019年9月3日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-

<https://svosetu.org/novel/180186/>